

カント『オプス・ポストゥムム』における自己定立論の再検討

批判期の自我論と比較して

尾崎賛美 (早稲田大学)

本発表ではイマヌエル・カント (1724-1804) の晩年期の草稿群、『オプス・ポストゥムム』(以下、『遺稿』と略記)における「自己定立 *Selbstsetzung*」の問題を考察する。カントの死後、ついにまとめられることなく終わった膨大な数の草稿が残されたが、様々な紆余曲折の末、12の束 (*Konvolut*) として、1936年と1938年にアカデミー版カント全集 (第21巻と第22巻) に収録された。『遺稿』研究の先駆けとして大きく貢献した E. Adickes の時代考証に基づき推定された1796-7年から1803年という執筆時期、批判期の思想との一貫性の問題、さらにしばしば散見される文体の乱れや書き損じ等から、『遺稿』が「老衰の産物」と揶揄されることも少なくなかった (Förster (1995), p. xviii) が、近年では、書簡内での『遺稿』に関する言及に基づいた、執筆時期の再評価も相俟って、『オプス・ポストゥムム』の思想内容を評価する場合にカントの老衰問題を持ち出すことはできない (加藤、370頁) とする立場もある。

さて、この『遺稿』執筆時期にカントが取り組んでいたプロジェクトは、1798年のガルヴェヤキーゼヴェッター宛の書簡の中で「自然科学の形而上学的原理から物理学への移行」として言及されている (Ak. XII: 256; 258)。自己定立論は、この「移行」プロジェクトを構成する主要テーマの一つでありかつ、批判期には少なくとも明示的には取り上げられなかったという意味で『遺稿』独特の議論でもある。英訳版『遺稿』の訳者兼監修者である Förster は、自己定立論は「カントの全批判哲学のではないにせよ、明らかに晩年の作品の白眉 *the culmination* であるが、この原理はほとんど顧みられてこなかった」(Förster (2000), p. 75) と評する。この後半の消極的な事情の背景については一括りに断定することはできないが、たとえばフィヒテらをはじめとした、カント自身の体系を超えて行こうとするかつての理解者たちへの対抗として、批判期には導出しなかった話題を急ぎ展開した議論に過ぎないとみなせば、こうした評価も頷けなくはない。

周知の通り自己定立とはフィヒテの知識学を一貫する根本テーゼである。ただし Förster はカントの自己定立論に対するフィヒテからの影響を明確に否定しており、『遺稿』における自己定立論の展開に際しフィヒテへの言及はいっさい確認されない指摘したうえで、むしろフィヒテが哲学的営みを開始するはるか以前に、自己定立という理論はすでにカントのうちに根差していたことを強調する (Förster (1990), p. 158)。

ではカントの論じる自己定立とはなにか。Förster はその内実を端的に「主観が自らを定立する、あるいは自らを経験の客観となすことの原理」(Förster (2000), p. 75) とする。ただし『遺稿』において自己定立が言及される箇所を見ていくと、自己定立概念を一義的には決定できない記述が散見される。顕著な例として、第7束では「私は存在する、これはいっさいの対象の表象に先立つ論理的な作用であり、それを通じて私が自己自身を定立するところの動詞 (*Verbum*) である」(Ak. XXII: 85) と言われる一方で、「空間と時間、そしてそれらにおいて規定可能なものとしての (可感的な) 自己自身の定立」(Ak. XXII: 47) という記述もみられる。

ところで、このように区別して論じられる自我のふたつの働きは、カントが『純粹理性批判』の第二版において展開した「自己意識 *Selbstbewußtsein*」および「自己認識 *Selbsterkenntnis*」の議論との連関を想起させる。これらふたつの議論は、カントにおいて重要な意味を持って峻別される。しかし他方で、『遺稿』の第10束には「(1) 主観としての自己についての意識 (同一性の規則に従った)。(2) 直観と概念とを通じた自己自身の認識。(3) 自己自身の定立: 空間と時間とにおける」(Ak. XX: 418f.) といった記述があり、カントは自己意識と自己認識とを自己定立から区別しているようにも思われる。また、もし仮に『遺稿』における二種の自己定立論と批判期における自己意識論および自己認識論と間に根本的な差異がないのであれば、なぜカントはわざわざ新たに論じる必要性があったのかという疑問も浮上する。

ただしこのような問題に関しては、たんに批判期の議論との比較のみならず、『遺稿』において自己定立論が展開された背景も併せて検討する必要がある。というのも先述した通り『遺稿』における元来の主題は「自然科学の形而上学的原理から物理学への移行」であったはずだからである。本発表ではこうした観点から自己定立の問題を扱う論者として先に挙げた Förster や Guyer, Matheiu、Bassler らの研究を踏まえるが、そこから導出されるのは、批判期には見られない『遺稿』における自己定立論独自の自我論である。そこで示されるのは我々の経験的な知の獲得の条件として、外界の諸事物からもたらされる力 (運動力) との物理的かつ相互的な関係が要請されることを背景とし、まさにそこで要請される契機として自己定立が位置付けられるということである。それは『遺稿』においては「経験的な自己意識を含む、いっさいの経験的な知の獲得」に際し、「我々の身体の物理的な運動」が必然的であるとみなされるようになるからであり (Guyer, p. 205)、このことは外的諸事物の「運動力との相互作用を可能にするところの身体を自らが有しているという理解を通じて達成される」(Bassler, p. 64) からである。このように『遺稿』に独特な自己定立の意義を検討することで、外的対象との相互的な力学的作用の関係のうちにおいて、身体をもってはじめて存在するものとしての自我に関する理解、換言すれば Matheiu が端的に指摘するように「私は同時に感性的な主観であることなしには思惟する主観ではありえない」

(Matheiu, S. 174) という批判期には明示的に語られなかった自我に関する理解が、カントの自我論における新たな側面を照らすのである。

【参考文献】

- Bassler, O. Bradley (2018), *Kant, Shelley and The Visionary Critique of Metaphysics*.
- Förster, Eckart (1989), “Kant’s *Selbstsetzungslehre*”.
- — (1990), “Fichte, Beck and Schelling in Kant’s *Opus Postumum*”.
- — (ed.) (1995), *Opus postumum* (First paperback edition).
- — (2000), *Kant’s Final Synthesis*.
- Matheiu, Vittorio (1989), *Kants Opus postumum*.
- Paul Guyer (2003) “Beauty, Systematicity, and the Highest Good: Eckart Förster’s *Kant’s Final Synthesis*”.
- 加藤泰史 (2006)、『オプス・ポストゥムム』と批判哲学の間。